

## 新型コロナウイルスに対する診療放射線技師の取り組み

伊藤 今一

(公益社団法人 神奈川県放射線技師会)

(国際親善総合病院 放射線画像科)

新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威を振るうなか、医療現場では、地域医療を継続しながら感染者の治療に当たると共に、感染拡大も食い止めなければなりません。我々が関わる放射線診療業務においても、新型コロナウイルス肺炎診断の一助にCT検査、また隔離室への回診X線撮影などの有効性が示され、神奈川県においては「入院優先度判断スコア」にCT/単純X線の肺炎像の項目が目安として盛り込まれた。これに伴い、感染が疑われる患者に対してもCT検査が行われ、検査件数はどこの施設でも増加し、感染対応でのフルPPE業務が多くなったに違いありません。

我々診療放射線技師が一番気をつけなければならないのが、場所・人・時間・装置のゾーニングであります。とくに他の医療スタッフと異なるのは「装置」です。CT装置やMRI装置をCOVID-19陽性または疑いがある患者が利用するとき、感染者専従装置をもつ施設は神奈川県下でも極めて少ないと思われまます。そのため、一般の患者さんも使用する臨床装置で検査が行われます。その時、一般の患者さんと交差させるわけにはいきません。事前に感染者とわかれば当然対応ができますが、現状でも後から陽性と判明するケースもあり、難しい対応を日々迫られました。今は救急で心肺停止の状態で搬送された患者や、陽性が疑われる患者のケースでは我々もフルPPEで対応するなど、万全の対策で業務を行っています。

これまでに経験したことのない感染防止対策という大きな試練に直面し「放射線診療」を安全に実施することに対して、どのような方策が正解かなどを模索する中、新型コロナウイルス対策に対する不安や思い通りにならない不満から、心の疲労を感じることもありました。その中で我々は、他の部門・部署のスタッフが、何に取り組んでいるのか、何に苦勞しているのか、そして患者や家族にとって何が最善であるかを考え、当事者意識をもって立ち向かうことが必要であると考えました。同じ病院や組織で働く職員に対して共感し、対話により自分たちの役割を考えて協調して行動すること。それぞれが感じていることや考えていることなどを言葉にして、共有することが必要であると考えました。感染症の対応に対して浅学である我々が、勝手に自発的な行動を起こすことは、組織に混沌を生じかねないものかもしれません。しかし、当事者として能動的にいくつもの小さな自発的な発想を提案し続けることにより、医療スタッフ間で共有され、柔軟に対応できたケースも増えていきました。多くの部署や組織で、私たちの考えや取り組みを受け入れていただいたことを感謝いたします。

神奈川県放射線技師会では、これからも安全で適切な「放射線診療」を提供するために、次に備えて、様々な情報の共有を行っていく必要があると感じています。感染症に対する放射線診療現場での対策については、会誌やホームページを活用して、各種検査・治療における具体的な感染防止策を紹介し、会員への情報提供を行っています。また、「放射線診療」における医療被ばくの適正管理にかかわる情報の提供や、各都道府県の放射線技師会の研究会や各種WEBセミナーの情報提供等を行っています。他職種と協調して行動できるように、様々な情報を共有する努力を行っています。

第一波より第二波・第三波と、今後さらに大きな局面が押し寄せて来る兆候もあります。しかし、診療放射線技師もCOVID-19感染防止の知識を持つスタッフを増やし、「こうすれば感染しない」という体制を構築し、確立していくことが急務であります。今やウィズコロナの時代であり、今後どんな新しい感染症にも対応できなければならない時代になったことを、会員に向けて啓発していかなければならないと考えております。